

“Young Goodman Brown” における

〈森〉の意味について

鈴 木 進

ヘンリー・ジェイムズが『ナサニエル・ホーソーン論』の中で、先輩ホーソーンに寄せたあの同情、つまり、ヨーロッパのロマンス作家には想像も及ばない文学の素材としての「文明の諸項目のないないづくし」¹⁾ という困難さの中であって、アメリカの作家たちには、その代りに、うっ蒼と茂る北米大陸の大森林が常に身近にあった。イギリス小説に挑戦して、ジェームズ・フェニモア・クーパーが森の一大叙事詩を描き、森の住人を生み出した時点から、ある意味で、アメリカ文学史が始まった、という言い方が許されるとすれば、北米の大森林こそアメリカ文学の産土と言えまいか。H.D. ソーローは自分自身、森の住人であったし、ホイットマンは森の『草の葉』の中から、高らかに荒野を讃美し、自己を歌った。目を転じて、コンクリート文明の林に住むわれわれの同時代作家ウィリアム・フォークナーが “The Bear” Go Down, Moses を書いた時でさえ、F. J. ターナーのフロンティア消滅宣言後、半世紀も過ぎていたのに、依然として大森林という素材に事欠かなかった。こうして森を主題とした系譜をアメリカ文学史の中に追っていけば「森の文学史」も不可能でないとさえ思われる。

正面きって自然を歌いあげることの少なかったナサニエル・ホーソーン作品の中にも、例えば *The Scarlet Letter* の第16章から始まる森の場面は、それ自身美しい自然の描写であり、読む者を限りなく魅了するものである。と同時に物語のターニング・ポイントとして、主題と深く絡みあっている部分として作品構成上、不可欠の場面である。森の描写としては、その他に *The Marble Faun* の27章や “Roger Malvin’s Burial” をはじめ多くの短編にも見られる。

ホーソーンが描く森は、同時に初期植民地ピュリタンにおける森でもある。ピュリタンにとって森は *heathern wilderness* であったから、当然悪魔の活躍する場である。そのような〈森〉がホーソーン文学の中で、いかなる意味を持つものであるかを、最もホーソーンらしい作品の一つ “Young Goodman Brown” の中に探してみたい。そしてホーソーンが生涯求め続けた〈罪〉の問題という中心的テーマとの関係を、ひとつにはホーソーン独特の罪理解 “Unpardonable Sin” という面と、もうひとつの “*Felix Culpa*” [幸運な堕落] のパターンにあてはめるとどうなるか、を一緒に考え合わせるのがこの小論の目指すところである。

(1)

ホーソーンの〈森〉に入る前に、ホーソーンが17世紀のアメリカの森を描く時の、背景として、ごく一般的に考えられる森のイメージをさぐって、ピュリタンにとって森とは何か、とい

う問題を少々考えたい。

新大陸への移住者たちが後にしたヨーロッパではすでに切り開かれていた森が、ここでは、うっ蒼と茂る大森林として彼らに迫り、黒々とした影を海に落していた。

森林は元来人間の生活の歴史と共にあり、人々は住居の木材を得たり、寒いヨーロッパにあっては燃料も供給したであろうし食料としての草木や、そこに住む動物なども得られた。肥沃な腐蝕土は農耕にも適していた。その意味では森は人々の生活と結びついた親しい存在であった。が同時に深い森が神秘的な場所であることから、森の住人たちは森の中の、人間を越えた事物を神々として信仰の対象として畏敬した恐怖の場所でもあった。人が深い原始森に、ひとたび迷い込むと、出口を見つけることが出来ず死んでしまうか、あるいは幸にして見つけた不思議な小さな家は魔法使の鬼婆が住んでいるお菓子の家であったり、小人や盗賊の隠れ家であったりするメルヒェンの生れる場所でもあった。ピューリタンの先祖が Pan や Odin などの神々を捨て、キリスト教に改宗したので、それらの神々は森の中に逃げ込み、村のキリスト教に対して、森の奥の異神の神々として生き続けていなかっただろうか。

ヨーロッパからの移住者たちが新大陸の土を踏んだ時、目の前にした未知の大森林は、忘れていた彼らの恐怖心と、遠い昔の非キリスト教的神々を再び呼び覚ませることになったであろう。森はヨーロッパのそれと違って、全く予測しがたい、時として敵意さえ感じさせる森であった。自らを新しいイスラエルになぞらえ“乳と密流れる約束の土地”へ脱出を果たしたピューリタンの生活が寓話的であり、「悪魔の最後の砦が北米の荒野にある」と信じていた人もいたのだから〈森〉が悪魔の住む国のアレゴリカル・シンボルに思えたのは当然であった。

森の先住民は視力も聴力もヨーロッパからの移住者のはるか及ばないところで、それは人間業とも思えなかった。彼らの目には赤銅色の肌の人々は……the Indian priests, or powwows, who had often scared their native forest with more hideous incantations than any known to England witchcraft.²⁾ [英国の魔法にも知られない呪文で自分たちの生れた森を脅かしたインディアンの祭司や呪師たち]であったので神の選民たるキリスト教徒の目指す Bible Commonwealth の建設を阻む悪魔の手先としか考えようがなかった。

夜の森に一歩足を踏み込んだ Goodman Brown は “There may be a devilish Indian behind every tree,³⁾ [あらゆる木のうしろというしろには邪悪なインディアンが潜んでいるかも知れない]と絶えず不安に駆られるのも、暗い森の Devilish なものへの恐れからである。

一方、ピューリタン自身も薄暗い原始林の中の小さな広場で may-pole を囲んで、しばしダンスにうち狂じ、暗い森を陽気な森に変えようとする移住者仲間を、厳迷な Endicott が剣をもって弾圧し、ふたたび暗い森に戻してしまうのだった。⁴⁾ Roger Malvinの彷徨う森には花も咲かなければ小鳥も歌わない孤独な呪われた森だ。⁵⁾

だから17世紀のピューリタンの世界にあって “Young Goodman Brown” の主人公が夜、外出する、しかも森の中に入っていくことは、暗い悪の世界へのプレリュードにほかならない。

(2)

“Young Goodman Brown” の物語構成は単純である。主人公が村を出発し、森の一夜を過ごし、またもとの村に戻る、それだけの物語である。

この〈村〉(または都会)は〈森〉に対する概念として、ホーソーンが好んで用いたテーマのひとつとして R. W. B. リースは重要視している⁶⁾がこの短い物語では量的にも質的にも〈森〉のみであって、〈村〉 vs. 〈森〉のコントラストとして読むには森のもつ比重が重すぎる。いわば、“Young Goodman Brown” は〈暗い夜の森の物語〉である。

旅に出る夫を思止ませようとする新婚の妻 Faith に、後髪引かれる思いで、しかし〔人間を悪に導く本能〕… the instinct that guides mortal man to evil⁷⁾ … によって Goodman Brown の踏み入る森の暗さは夜の暗さのせいだけではない。

He had taken a dreary road, darkened by all the gloomiest trees of the forest, which barely stood aside to let the narrow path creep though, and closed immediately behind. It was all as lonely as could be ; and there is this peculiarity in such a solitude, that the traveller knows not who may be concealed by the innumerable trunks and the thick boughs overhead ; so that with lonely footsteps he may yet be passing through an unseen multitude.⁸⁾ (イタリックス筆者)

〔彼は森の木々の暗さのせいで暗くなったさびしい道を歩んでいた。森の木が狭い道を通すためにかろうじてわきに寄ると、その通りすぎた後をすぐ閉じてしまうのだ。道は限りなく寂しく、そこに行く者は無数の木の幹や頭上の茂った枝のうしろに誰が陰れているか見当がつかないほどの孤独の中にこうした独特のものがあつた。そして寂しい足音のために目に見えぬ大勢の中を通りすぎているのかも知れないと思った〕

この引用の個所は文体の上ではホーソーンの背景描写の巧みさを示しているし、内容的にはピュリタンの森のイメージの特徴をよく表わしている。森は heathern wilderness, 悪魔の住む場所、悪魔の象徴である。その中で Brown 青年を待ちうけていた “the figure of a man” こそ森の悪を支配する悪魔の化身にほかならない。

この森の悪魔はかつてパロの神殿でエジプトの魔法使が蛇⁹⁾に変えたという記事を連想させる杖を手に、Goodman Brown との約束の森のいちばん暗い場所 “deepest in that part of it” で彼の来るのを待兼ねていた。Brown は暗やみの中で突然悪魔に声を掛けられても、それが “not wholly unexpected” と言っているところをみるとメフィストフィレスのようにすでに悪魔に魂を売る契約を結んでいたことがわかる。ホーソーンと Faust 伝説との関連性を批評家が指摘するところである。¹⁰⁾

ホーソーンが好んで描いた17世紀においては、悪魔や魔法を信じることは一般的であり、特にニューイングランドの辺境開拓地では神から託された神の国の建設を妨げる者として、もし

自分達の仲間にも悪魔と通じる者がおれば、例えそれが噂であったとしても、ニューイングランドを追放されることになる。“… the least rumor of the sort would have driven them from New England.”¹²⁾ ピュリタンが悪魔や魔女に異常なほど神経を鋭くしたことは、あの悪名高き Salem の魔女裁判に見る通りである。

“Young Goodman Brown” 中での悪魔は、善良な（あるいは自分では善良であると信じていた）Brown を、たった一夜のうちに信仰から離れさせ、ついには A stern, a sad, a darkly meditative, a distrustful, if not a desperate man…にしてしまう。悪魔は Brown が信仰の模範として、社会の指導者として、尊敬してきた人々が、実は夜の世界においては悪魔の友人であることを暴露して、彼の信仰の確信を次々に崩していくのである。まず、自分の家系が正直で、善良なキリスト教徒の家柄であるので父や祖父を裏切った思いに責められる、という Brown の言葉を一笑に付し、悪魔は、彼らこそ witch meeting の常連であったと言う。悪魔はさらに続けて、町の有力者達はみんな自分の友人であり支持者であると言う。Goodman Brown の心に多少迷いが生じ始めた時に、彼らの前を急ぎ足で行く老婦人が a very pious and exemplary dame, who had taught him his catechism in youth,¹¹⁾ [敬虔な模範的信仰の持主の婦人であって、少年の頃彼に教理問答を教えてくれた] Goody Cloyse の姿であった。彼女もまた、夜の森の世界における魔女であったのだ。悪魔は Brown の信仰にさらに激しい試練を加える。Faith や Gookin 執事の善良さを思う時、Brown の良心はこれ以上悪魔との付合を許さない。悪魔と別れる固い決心をして家路につこうとしたその時、馬の蹄の音が聞え、近づく馬上の二人の声は Brown の耳の底に残っている牧師と執事の声と同じなのだ。彼らもまた、今夜の witch meeting に行く途中だと知って Brown の信仰は決定的に崩れ去ろうとする。キリスト教徒が信じられない。もはや信仰を捨ててもよい、人間の愛 (Faith の愛) のうちに留まろう。“With heaven above and Faith below, I will yet stand firm against the devil !”¹²⁾ [頭上に 天があり、その下にフェイスがいるならば断固悪魔に対して頑張るぞ]。Faith さえ自分と一緒にならば。そう思う Brown の頭上に Faith の着けていたピンクのリボンが落ちてきたのだ。“My Faith is gone !” Brown のキリスト教信仰 (faith) も、妻 Faith も自分から離れ去ってしまったのだ。

悪魔の原語 Satan はヘブル語の邪悪な企てをおこし、反逆する心を人におこさせる。あるいは敵対者という意味である。人間の信仰が偽せものでないかどうか試み、偽りを発き、告げ口をする者の意でもある。¹³⁾ 森の悪魔もまた、Brown の信仰を試みる者であった。

絶望のあまり気も狂わんばかりになった Brown が暗い森の中をなおも突進んで行くと、森の奥に、不気味な赤い炎が燃える広場に出た。木々がざわめく荒野の嵐とも、あるいは聞きよによっては、村の教会の聖歌隊がよく歌う讃美歌とも思われる響きが Brown の耳に入ってきた。広場の端には説教壇か祭壇を連想させる岩があり、森の黒い木々は会堂の壁を思わせ、その中に梢だけが燃えている四本の松は教会の夕拝のローソクに相当した。岩の窪みの赤い液体は洗礼のためのものだろうか。これらすべてキリスト教の教会に酷似している。がそれより

も、ここで行われる儀式はむしろずっと昔に亡びた筈のキリスト教の異端としてのグノーシス派の集会を思わせる要素を多くみせる。つまりグノーシス派の主張が魂の教会を重んじ、建物としての会堂を必要としないところから、夜、野外で集会をもったこと。正統的教会に入り切ることが出来なかった異端者たちが、表向き教会を信じたかのように振舞い昼の教会の信仰を続けながら夜の Sabbath にも出席する悪魔的キリスト教に近い。¹⁴⁾ そのようなものが辺境の植民地において、白人と土着のインディアン信仰と一緒に表われたものに思われる。

The Scarlet Letter の中で魔王の帳簿にサインした Mistress Hibbins もそのような人々のことを、Many a church-member saw I, walking behind the music, that has danced in the same measure with me, when Somebody was fiddler, and, it might be, an Indian powwow or a Lapland wizard changing hands with us !¹⁵⁾ 昼の間は信心深く振舞っているながら夜の魔王に魂を売る人々と呼んでいる。

Brown は今や完全に悪魔の支配のもとにあった。会衆の中には Brown がよく顔を知っている植民地の有力者や、教会の高潔な20人の教会員や長老たちの顔もあった。白人にまじってインディアンの Powwows の顔も見えた。善良な人たちも邪悪な者どもも悪の讃歌を合唱しているうちに、ニューイングランドのある教会の牧師にそっくりな人影が現われ「人間の本性は悪だ、悪こそ人間の唯一の幸福である」“Evil is the nature of mankind. Evil must be your only happiness.”¹⁶⁾ と説く。ここで作者は〈善〉より〈悪〉により関心を示している。祭壇の前に連れ出された Brown は〔心の中にある、あらゆる邪悪な思いと共鳴して〕会衆に対し兄弟姉妹であることを感じる。原罪を背負って生れた人間が悪にはしり易い傾向を示すものであり、“By the sympathy of your human hearts for sin” で地球全体が罪で汚れているのを見て大喜びする、という。そして “There is no good on earth ; and sin is but a name. Come, devil ; for to thee is this world given.”¹⁷⁾ [この世に悪などない、罪とは名前だけのものなのだ。悪魔よ来い、この世をお前に呉れてやるから。]という結論に達する。善のない世界では悪は存在しないのだ。悪がなければ罪もない。すべて悪一色なのだ。

この結論を即ホーソーンの結論と受取るのは勿論誤であろう。ホーソーンの主張はむしろ、悪魔が Brown の目を通して隣人たちの信仰に懐疑を抱かせ、ピューリタンの偽善性を発きたい欲望に駆らせたところにあったと思われる。なぜなら悪魔が Brown と Faith に洗礼の印をつけるのは、〔自分の罪より、より多く他人の犯した罪を知るようになるためである〕This night it shall be granted you to know their secret deeds : …… that they might be partakers of mystery of sin, more conscious of the secret guilt of others,¹⁸⁾ Goody Cloyse が、牧師が Gooking 執事が、そして、Faith が罪を犯したものと思込んで、その人たちを許すことが出来ないからである。つまり Brown の心の中の邪悪な思いを他人に投影してその人たちが信じられなくなる。その結果同胞に対する愛を忘れ人間同士の絆を自らの手で断ち切るという “Unpardonable sin” を Brown が犯したのだ。

original sin を問題にする時に、ホーソーンは正統のキリスト教と多少異なる扱い方をする。

彼の場合は神に対して悪を行なう罪よりも、罪の結果として人間と人間との連帯を断ち、人間の社会から *estrangle* してしまうことに重点がある。Man must not disclaim his brotherhood, even with the guiltiest,¹⁹⁾ という言葉が示すように、人間同士の共感を失いエゴイストになることがホーソーンの言う〈罪〉である。Brown 青年が “A stern, a sad a darkly meditative, a distrustful, if not a desperate man になったのは小文字の faith [信仰] を失なったと同時に、妻である大文字の Faith との人間としての絆を切ったためである。

一夜を森で過し村に帰った Brown はいつもと変らぬ善良な牧師に出会っても、牧師の祝福を呪いとししか取れなくなってしまう。家庭礼拝中の Gookin 執事の声を、開いた窓から耳にして “What god the wizard pray to ? ” とつぶやき、教理問答を教えている Goody Cloyse の手から子供を引ったくり、夫の姿を見つけ人前も憚らず駆け寄る Faith に冷やかな目付きを送って言葉も掛けずにわきを通りすぎるのである。これは自己中心という「胸中の蛇」に悩まされる Elliston と同じ類型に属する、ホーソーンが一番憎む〈罪〉の姿なのである。

「私は Faith (信仰) をなくしてしまった」という Brown の耳には安息日の讃美歌が罪の讃歌に響き、聖なる礼拝はもはや冒瀆者たちの集会とししか写らなくなってしまう。救の希望の持てない彼の墓碑に “they carved no hopeful verse upon his tomb.” ホーソーンは Brown を批判して、牧師も、尊敬する村人たちも、自分の妻さえも、すべて悪魔の洗礼を受けた罪人である、と信じ込み人間に絶望し、自分ひとり孤高としている Brownこそ「許されざる罪人」²⁰⁾ としているのである。ここにホーソーンの罪の扱い方の特殊性がある。

暗い〈森〉の中の、迷える Goodman Brown の信仰は、19世紀アメリカ社会におけるホーソーン自身のキリスト教信仰の迷える姿とも言えよう。初期ピューリタンの火のような信仰はすでに燃え尽きて、The Great Awakening の残映はユニテリアニズムや抬頭しつつあったデモクラシーとぶつかり合う混乱の時代であった。ピューリタンの傾向をもつホーソーン自身それらの新しい思想にも共鳴を感じたのだ。

ランダル・スチュワートはホーソーンとメルヴィルを並べて、信仰と不信仰との葛藤を二人の悩める姿として *English NoteBook* の中に指摘している。アメリカ領事としてリバプールの勤務していたホーソーンを旧友メルヴィルが訪ねた時、メルヴィルを評した1856年の日記の中に He can neither believe nor be comfortable in his unbelief; and he is too honest and courageous not to try to do one or the other ;²¹⁾ …〔彼は信仰をもつことも出来ず、自分の不信仰におちつくことも出来ない。また彼はあまりに正直で勇気がありすぎるので、どちらか一方にきめようとしたいのだ。〕(『アメリカ文学とキリスト教』刈田元司訳)。スチュワートは、「この信仰と不信仰との間の戦がなければ、その名に価するキリスト教信仰はありえないし真の人間的同情もありえない」と結んでいる。

Brown もまた夜の森の悪魔の祭壇の前に立って信仰をとるか不信仰か、選択を迫られる。…the shape of his own dead father beckoned him to advance, …… while a woman …… threw out her hand to warn him back. Was it his mother ?²²⁾ [死んだ父の姿をしたも

のが彼に前に出るように手で招いた。しかるに一人の女が手を差出して、来るなど合図した)。Brown はホーソーンとメルヴィルが苦しんだ悩みを、悪を選ぶことによって解結してしまった。

ここで選択が〈森〉の中で行われたことに注目する必要がある。ホーソーン文学の〈森〉に注意を払う批評家の一人、R.W.B. ルイスは〈森における選択〉という問題を巧みに解説してくれている。ルイスの主張を要約すると大体次のようになるであろう。彼によれば、クーパーの森からホーソーンの森に移ったとたん、森は悲劇的舞台になる。ホーソーンは self-reliance のエマソンに同情を寄せると同時に、ジョナサン・エドワーズ的体質をもっていて、彼の作品の主人公は最初希望の人であっても、何か恐ろしい出来事に出合ったために、エドワーズの時の重圧のもとにある世界に紛れ込む。ホーソーン的アンビヴァレントな形のこの状態にある者は、自分の落込んだ状況に甘んじるか、あるいはそこから、自由だと思われる外の世界に脱出を試みるか、この二者択一に迫られる。この二者とは〈森〉と〈村〉という言葉で表現される。ホーソーンがピューリタンの〈森〉を疑惑視していたから象徴として用いた森は悲劇的ドラマにおける逆転劇の行われる場所、「逃亡と復帰」というホーソーン作品に常に現われるパターンである、という。

なるほどルイスの例証するとおり、*The scarlet Letter* の森においては、選択の場に立たされた Dimmesdale と Prynne の二人は、〈自由へつながる〉と思われる深い荒野への右の道を行くか、それとも〈村へ戻る〉左の道を取るか決断の時に、結局はピューリタン社会に帰って懺悔台に続く道を歩んでしまう。森の中で牧師を選択の場に導いたのは Prynne であるから、彼女を「神に背く誘惑者」〈森の悪魔〉と見なす Philip Rahv の意見は頷ける。ルイスはさらに *Marble Faun* においても、ローマからアパニンの〈森〉に逃れた Donatello も Miriam も、彼らの〈森の中の選択〉を結局はローマに帰って罪の責任をとるという「逃亡と復帰」で説明してくれている。²³⁾

Brown の場合は Faith と因襲の村を逃れ、森で悪に開眼し、悪に打ちのめされ、村に戻って来る、という点でルイスの言う「逃亡と復帰」のパターン通りであるが、戻り方において Dimmesdale や Donatello と根本的に異なっている。牧師も Donatello も町に戻って〈救に至る〉のに対して Brown は最後まで救われず “they carved no hopeful verse upon his tomb.” という「完全な墮落」に陥ったのである。

(3)

ホーソーンの多くの作品に共通するテーマは〈罪〉の問題と〈孤独〉の問題である、と言っても異論はないであろう。その罪と孤独は別々に扱われるのではなくて、罪を犯した結果――

“Roger Malvin’s Burial” の Reuben の場合など見方によっては罪ではない、と言っても許される――罪の意識により隣人を自ら避けて利己的になり孤独に陥る主人公が多い。換言すればホーソーンの描き続けたものは〈人間の心の問題〉で見えるものの中に見えないものを見る、つまり自然と人間の営みの中に、神が何を計画されているかを知ろうとするピューリタンのアレ

ゴリカルな生活伝統と、Bunyan や Spencer を好んで読んだホーソンであるから、自らの作品の中で〈人間の心の問題〉を語る時にもアレゴリカルに心を〈洞窟〉という比喻で表わしたことが多い。

The American Notebooks の1843年の記事の中に the truth of human heart を表わすホーソンの考え方を見つけ、これにより〈人間の心の問題〉の作品を適切に解説された横沢四郎氏の記事を引用させて頂く。

それは、heart を洞穴にたとえているのである。①洞穴の入口には花が咲き、陽が射している。②しかし中に入るにつれて暗くなり、色々な怪物がうごめいており、人はその中で全く希望を失ってさまよう。③しかしついに一本の光がさしてくる。その光の方に行くと、なにかしら洞穴の入口の花と陽光を再生しているような地帯に出る。闇はなおただよってはいるが、さらに奥深くには、永遠の美がある。これが人間の心の深奥であるという説明がされている。つまり、入口の部分は、Adam の堕落以前の罪のない世界であり、洞穴の中の暗闇は、罪の世界、そして最後の部分は、罪を経験して後に達する世界であって、最初の世界に似てはいるけれども、それよりも高度な内的世界を示しており、ここに、キリスト教で言う fortunate fall が、暗示されているように思うが、……………²⁴⁾

fortunate fall〔幸運な堕落〕のテーマはホーソンの最後の長編 *The Marble Faun* に最もよく現われているテーマである。「人類の堕落の物語！それはわがモンテベニ物語に繰り返されているのではないのでしょうか。この類推をさらにたどってもいいかも知れない。その中にアダムとあらゆる人類がまっさかさまに転落した罪であってそのように決められていた手段であった。それによって長い苦みと悲しみの道をのり越え、人類はアダムが得ていたよりもより高い輝かしい深い幸福に達することが出来るようになっていない？」という Miriam の言葉に要約されよう。文字通り森の Faun を思わせる自然児 Donatello が、愛する Miriam に付まとう黒い影を断崖から突落してしまう。しかし罪の意識と苦悩のどん底の中に Donatello が初めて悪と善を知り〈人間〉として成長したのである。

横沢氏は前述の説明に続けて、Donatello は①の世界から②へ、そして③の幸福な堕落に達したが、短編では多く②の部分にとどまってしまった、という指摘に筆者は同意する。つまり“*Young Goodman Brown*”では①Brown は Faith と共に因襲的ともいえるピュリタン信仰の中に何の疑いも抱かず村の生活を送っていたが、②ある夜暗い森の中に迷い込み、悪を目撃し絶望してしまう。村へ戻っては来たものの、彼はそこには一条の希望の光をも見出せない、つまり依然として②の世界に止まっていて、Donatello が開眼して成長したのに対し Brown は〈完全な堕落〉に落ち入ってしまったのだ。

ホーソンの ambiguity はよく言われるところであるが“*Young Goodman Brown*”では“*Had Goodman Brown fallen asleep in the forest and only dreamed a wild dream of a witch meeting? Be it so if you will;*”〔ブラウンは森の中で寝入ってしまって魔女の集会の悪い夢をみたのにすぎないのだろうか。お望みならそういうことにしよう。〕の解釈をめ

ぐって、Brownの出合った森の中の出来事を現実のことという前提で論ずる立場があるからである。しかしそれを立証する言葉は作品の中に見出すことは出来ないし、森の中の人物や出来事すべてが〈幻影〉としか描かれていない。それなら、あれは悪夢であったのか、というと、これもまた決め難い。結論を引出せる可能性があるとしてどちらか一方に決着をつけることはたして意味があるかどうか改めて考え直す必要があるところであろう。批評家の中には、この ambiguity は作者が故意に狙ったのであり、この ambiguity 故に作品の芸術性を高めていると評価しているものさえある。²⁵⁾

それなら “Young Goodman Brown” における〈森〉は何なのか。ホーソーンが〈人間の心〉を洞窟になぞらえたのは前述の通りであるが、この作品では洞窟の代りに〈森〉が用いられたのである。作者は Brown という主人公を通して、人間の邪悪な心のシンボルとしての〈森〉を彷徨わせ邪悪な思いを悪魔の姿で dramatize したのである。そして前述の横沢氏の説を借りれば Brown は遂に③へ移ることのない〈完全な墮落〉の物語である。

(注)

- 1) Henry James, *Hawthorne* (Macmillan, New York, 1967) p. 55.
- 2) Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown” (*The Complete Novels and Selected Tales of NATHANIEL HAWTHORNE*, Modern Library, New York, 1965) p.1040. 以下引用に用いるテキストはこの版のページによる。
- 3) *ibid.*, p. 1034.
- 4) Nathaniel Hawthorne, “The May-Pole of Merry Mount”
- 5) Nathaniel Hawthorne, “Roger Malvin’s Burial”
- 6) R.W.B. Lewis, *The American Adam* (Univ. of Chicago Press, 1971) p.113.
- 7) Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown” p. 1038
- 8) *ibid.*, **PP.** 1033—1034
- 9) 蛇 [the likeness of a great black snake] のイメージはホーソーンが悪を表わすシンボルとしてよく用いる。例えば Signor Rappaccini の庭にくねくね這っている薬草や彫像に絡りつく植物は蛇の姿を思わせる。また “Egotism ; or, The Bosom Serpent” の Roderick Elliston の [a serpent in his stomach] として allegorical に描かれている。
- 10) William B. Stein, *Hawthorne’s Faust : A Study of the Devil Archetype*,
- 11) Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”, p. 1035.
- 12) *ibid.*, p. 1038.
- 13) Satan, *The Oxford English Dictionary* による。
- 14) 種村季弘「西洋の悪魔的なもの」『英語研究』第62巻第1号 **PP.** 4—11.
- 15) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, op. cit., p. 227
- 16) Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown” p. 1041
- 17) *ibid.*, p. 1038.
- 18) *ibid.*, p. 1041.
- 19) Nathaniel Hawthorne, “Fancy’s Show Box”, *TWICE-TOLD TALES* (Ohio State Univ. Press, p. 226.
- 20) ホーソーンは “Ethan Brand” の中で He had lost his hold of the magnetic chain of humanity. He was no longer a brother-man, opening the chambers or the dungeons of our common nature by the key of holy sympathy, which gave him a right to share in all its secrets; he was now a

cold observer, looking on mankind as the subject of his experiments, and, at length, converting man and woman to be his puppets, and pulling the wires that moved them to such degrees of crime as were demanded for his study. このような人物を “the Unpardonable Sin” を犯した者としている。

- 21) Nathaniel Hawthorne, the extract from *English NoteBook*, (The Portable Hawthorne, edited by Malcolm Cowley, Viking Press, 1960) p. 589
- 22) Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown” p. 1040.
- 23) R.W.B.Lewis, *op. cit.*, PP. 111–114.
- 24) 横沢四郎「アメリカ初期の短篇小説、Nathaniel Hawthorne」『英語青年』第111巻第10号 p. 659.
The American Notebooks の原文は The human Heart to be allegorized as a cavern ; at the entrance there is sunshine, and flowers growing about it. You step within, but a short distance, and begin to find yourself surrounded with a terrible gloom, and monsters of divers kinds ; it seems like Hell itself. You are **bewildered**, and wander long without hope. At last alight strikes upon you. You press towards it yon, and find yourself in a region that seems, in some sort, to reproduce the flowers and sunny beauty of the entrance, but all perfect. These are the depths of the heart, or of human nature, bright and peaceful ; the gloom and terror may lie deep ; but deeper still is this eternal beauty. (Centenary Edition, the Ohio State Univ. Press, 1972) P.237.
- 25) R.H.Fogle, Hawthorne's Fiction ; *THE LIGHT & THE DARK*, (Univ. of Oklahoma Press, 1969) P. 16.